

第6節 プレゼントツリーの森づくりが育む関係人口

～ 共創型森林再生がもたらす「人の循環」の20年～

鈴木敦子（認定 NPO 法人環境リレーションズ研究所 理事長）

1. はじめに ～ なぜ、「関係人口」を森づくりから論じるのか～

日本は、かつて経験したことのない人口減少局面に入っている。総人口の減少だけでなく、その内実として、生産年齢人口の激減、超高齢社会の進展、そして地域間の人口偏在が同時進行している点に、この局面の深刻さがある。特に中山間地域では、限界集落化が進み、耕作放棄地や再造林未済地が増加、昨今の熊災害に象徴されるような獣害が増え、国土の保全や水源かん養、景観・伝統の維持といった機能が果たせなくなり、地域社会そのものの持続性を揺るがす段階に達している。

こうした背景の下、2010年代後半以降、地方創生の文脈において、「関係人口」という概念が頻繁に用いられるようになってきた。地域と継続的に関わる多様な人々を指すこの概念は、人口減少社会における地域政策の新たな軸として期待を集めている。総務省をはじめとする関係省庁や自治体は、交流人口の拡大よりも、関係人口の創出・拡大をターゲットとして掲げるようになった。

しかし一方で、関係人口政策の実装は容易ではない。多くの施策が、イベント参加者数や滞在日数といった量的指標に引きずられ、関係性の質や持続性を十分に担保できていないという課題を抱えている。短期的な事業評価や単年度予算の制約の中で、「関係人口を育てる」という本来時間を要する営みが、断片化されている実態も否めない。

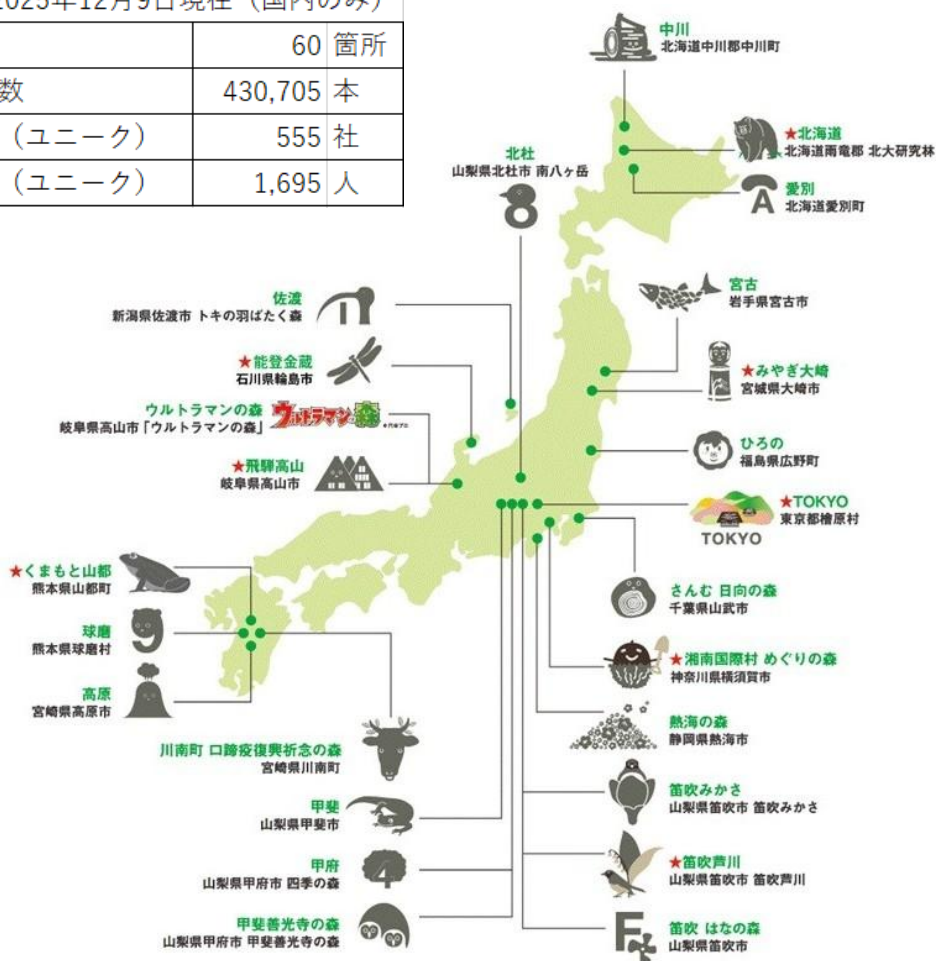
このような状況において、森林再生という一見すると関係人口政策とは距離のある分野から、20年にわたり持続的な「関係人口」を生み出してきた取り組みが、当法人が展開する「プレゼントツリー (Present Tree)」である (図表 1)。

プレゼントツリーは、2005年に「人生の記念日に樹を植えよう」という呼びかけの下に始まった共創型森林再生プロジェクトである。都市部の人々が、全国各地の過疎地域に在る皆伐放棄地や災害跡地、開発跡地など造林が必要な場所に、自分や大切な人のための“記念樹”を植えてその樹の里親となり、地元とともに10年間その成長を見守る。都市と山村が交流しながら協働で森を育てるこの取り組みは、森林再生のみならず、都市と中山間地域を結ぶ持続的な関係性の構築策として、各地域、とりわけ過疎・高齢化が深刻化する地域から期待され、森林整備協定を結んできた。

本節では、プレゼントツリーが20年にわたり、全国24自治体で計60カ所の森林整備協定(または契約)を締結し、都市の人々と森とを繋いできた実践から、共創型森林再生に伴う関係人口の意義と課題を考察する。

図表 1 里親参加の概況とプレゼントツリーの森の分布

2025年12月9日現在（国内のみ）	
協定林数	60 箇所
里親受入本数	430,705 本
企業里親数（ユニーク）	555 社
個人里親数（ユニーク）	1,695 人



2. 「人生の記念日に樹を植える」という行動経済学的発想

プレゼントツリーを立ち上げた 2000 年代初頭、日本の森林・林業は深刻な構造問題を抱えていた。戦後の拡大造林政策によって造成された人工林は伐期を迎えていたにもかかわらず、国産材価格の低迷により伐採・再造林が進まなかった。何とか伐って売ったところで、再造林に必要な費用を賄えず、皆伐後に植林されないまま放置される土地、いわゆる「皆伐放棄地」が全国的に増加していたのである。

一方で、都市部の住民の多くは、森への憧れや森林保全に対する一定の関心を持っていた。「森を守るべきだ」という意識は広く共有されていたが、それが具体的な行動に結びつくことは稀であった。この「意識はあるが動かない」状態は、環境政策全般に共通する課題であり、従来型の啓発や呼びかけだけでは限界があることが明らかになっていた。

プレゼントツリーが採用したアプローチは、この意識と行動のギャップを正面から埋めようとするものではなかった。むしろ、「人はなぜ動かないのか」ではなく、「人はどんなときに自然と動くのか」という問いから出発している。その答えとして着目したのが、人生の節目や記念日である。

出産、結婚、就任、退職、叙勲、あるいは故人を偲ぶ機会——人は人生の節目において、何かを記念したり、誰かに想いを伝えたりしようとする。その行為は環境意識とは無関係に、極めて自発的かつ感情的なものである。プレゼントツリーは、こうした日常の行動動線の中に、森林再生への入口をそっと差し込んだ。

このスキームは、実は極めて緻密な行動経済学的アプローチから生まれている。プレゼントツリー誕生から遡ること3年前、経済産業省環境政策課からの委託を受け、「環境意識は高いのに動かない人たちを“そっと後押し”する仕掛けづくり」のための調査を行った。その成果から生まれたのがプレゼントツリーである。

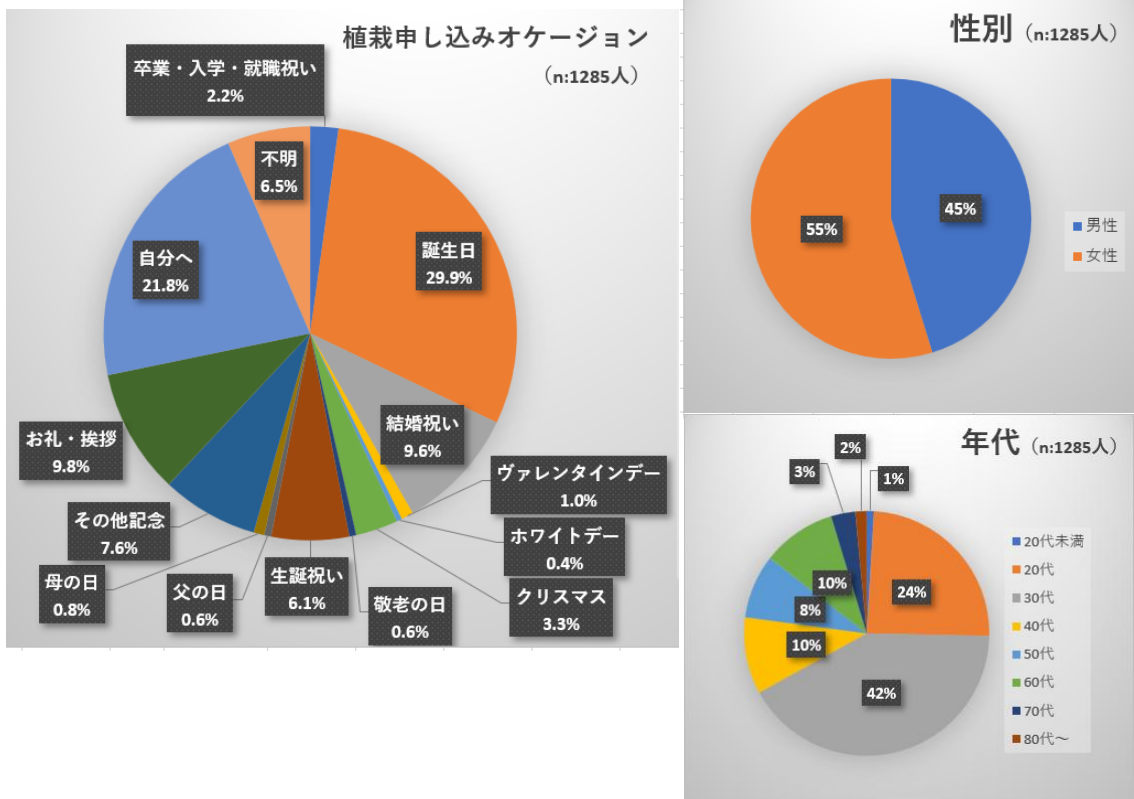
詳細は割愛するが、重要なのはこの設計に「動員」や「義務」が一切存在しない点である。環境保全への参加を正面から求めるのではなく、個人の潜在意識や内的動機に寄り添い、その結果として森林再生に関与させる構造をつくるこの仕組みは、行動経済学におけるナッジ理論が示す行動変容の枠組みと通じる。里親の多くは当初から地域に関わろうとしていたわけではなく、記念樹を贈る・贈られる、あるいは植えるという行為を通じて、気付けば特定の地域と結びついていたのである。

このような「意図しない関与」は、関係人口の裾野を広げる上で極めて重要である。関係人口を政策的に拡大しようとするとき、関心層や意識の高い層に依存するだけでは限界がある。プレゼントツリーは、関心の有無にかかわらず、人々が自然と関係性の入り口に立ってしまう仕組みを提示したと言える。

実際に、個人の申込み状況を見ると、20～30代が7割近くを占めるものの、男女共に幅広い年代の人たちが、誕生祝を中心とするさまざまな人生の節目に利用しており、日常的な記念行動の延長としてプレゼントツリーが選択されていたことが読み取れる（図表2）。

さらに、この入口は一過性ではない。一本の樹が植えられると、その樹の里親となった証として「植樹証明書」が発行され、10年間の協定期間を通じて、その地で自身の樹が育ち続けることが可視化される（図表3）。記念樹を植えた人、あるいは贈られた人は、その成長を10年にわたり見守ることで、植栽地との関係を継続していく。関係人口施策においてしばしば欠落しがちな「時間」という要素が、ここでは当初から制度として組み込まれているのである。

図表 2 本プロジェクトへの参画動機と属性の概況



図表 3 里親に届けられる植樹証明書とメッセージ (掲載許諾を得たものから抜粋)

出産のお祝い

ご出産おめでとう!
Rくんの誕生を記念し、この大地に樹を植えました。植えた樹と同様にRくんが立派な根をはり、すくすくと大きくなるのを楽しみにしております。この樹が生樹となる10年後、世界が平和で地球に緑が溢れていますように、そしてRくんを含めた子供連みんが幸せでありますように!

ご息女の生誕おめでとうございます。
この地球に一つの命が生まれたことを記念し、樹を植えました。ご息女がこれから立派な根をはり、すくすくと大きくなることを祈念しております。Sちゃん、お父さんもお母さんもそしてみんなが、あなたが生まれてくる事を心の底から望んでいました。生まれてきてくれてありがとう!

お誕生、おめでとうございます。あなたの命が、私たちの屋に生まれたことをよろこび、樹を植えました。Hちゃんが大地に大きな根をはり、すくすくと成長されることを願っています。いつかHちゃんが大きくなったら、あなたを愛しているお父さん、お母さんと一緒にぜひ、この樹に会いに行ってください。

赤ちゃんの誕生記念

生まれてきてくれてほんとうにありがとう。
ふたりはママとパパがずっと待ち望んでいて、来てもらった大切な子どもたちです。いっしょにすくすくと育ててほしいという気持ちをこめて、樹を贈ることにしました。この樹が大きくなったころ、ふたりがどんなことに夢中になっているか、今からとっても楽しみです。これからいっしょに過ごせる時間をとても楽しみにしていますよ。

この世に生まれてきてくれて、本当にありがとう。
パパ、ママはAちゃんが生まれてくる事を、心の底から望んでいました。Aちゃんの誕生に合わせて植えた木を、Aちゃんとママの3人で見に行く事がとても楽しみです。緑あふれる大地に植えられ、広い青空に向かって元気良く成長している木とAちゃんのどっちが大きくなるかを競争だよ。

地球へようこそ!
大事な命がここに生まれたことを記念し、樹を植えました。Y君もこの樹も、すくすくと大きくなるように願っています。元気に育ててくださいね。

結婚式で両親へ

お父さん・お母さんへ
今日まで育ててくれてありがとうございました。これからは、二人で笑って、泣いて、支えあいながら、夫婦としてこの木と一緒に成長していけたらなあと思います。見守ってください。

今まで育ててくれて、ありがとう。
感謝の気持ちをこめて、樹を植えました。いつか、この樹が大きくなったら、一緒に観に行きましょう。まだまだ未熟な二人ですが、どうか見守ってください。体には気をつけて。これからもよろしくね。

今まで暖かく見守ってくれてありがとう。
感謝の気持ちを込めて、花束に代えて樹を植えて贈ります。いつか大きくなったこの樹を産まれてくる孫と一緒に観に行きましょう。

3. 「10年間の森林整備協定」の時間設定で関係人口を育成

プレゼントツリーの大きな特徴の一つが、「10年間の森林整備協定」という制度設計である。多くの地域施策が単年度、あるいは3～5年程度の事業期間を前提として設計されているのに対し、本プロジェクトでは当初から10年という長期の時間軸を明示的に設定している。この点は、森林再生という長期的営みの特性を踏まえたものであり、同時に関係人口の育成を視野に入れた点で、他の施策とは一線を画す本プロジェクトの最たる特徴と言える。

この10年協定は、地元行政、森林所有者、施業者、当NPOという4者が対等な立場で締結（図表4）するものであり、記念樹の維持管理と事業の継続性を担保する役割を果たしている。政策的観点から見ると、ここには2つの重要な意味がある。

第一に、森林再生という分野の特性を踏まえた「時間合理性」である。特に広葉樹を主体とする混交林の育成であることが多い本プロジェクトにおいては、短期間で成果を求めること自体が非現実的である。プレゼントツリーのアドバイザーであり、広葉樹造林に造詣の深い北海道大学の吉田教授によれば、苗木が根付き、外部の人為的支援に依らず自立的に成長し始めるまでには、概ね3年から7年の時間を要するという。10年という区切りは、こうした造林学的知見を踏まえつつ、社会制度としても共有・理解されやすい時間軸として設定されたものである。第二に、関係人口を「育成対象」として捉える視点である。多くの関係人口施策では「創出」という言葉が用いられるが、関係人口は施策によって即座に生み出されるものではなく、時間を掛けて育まれるものである。里親は、記念樹を植えた瞬間に関係人口になるわけではない。初年度は「自分や大切な人のための一本の樹」への関心に留まることが多い。しかし、数年を経て苗木の成長とともに愛着も育ち、下草刈りや獣害対策といった地道な手入れが続けられていることを知るにつれ、関心は次第に森全体へと広がっていく。さらに現地を訪れ、施業者や地域住民と顔を合わせて交流することで、「この森を支えている人たち」の存在が具体的なものとして認識されるようになる。

こうしたプロセスは一朝一夕には起こらず、関係性が深まるまでの「時間」を制度として保障することが不可欠である。10年協定は、関係人口施策においてしばしば欠落しがちな「関係性の熟成期間」をあらかじめ織り込み、「森だけでなく周辺地域全体が元気になっていく」という好循環を確立するため、造林学的知見に基づくと同時に、協定4者が協働して「関係人口」を育むための10年間なのである。

さらに重要なのは、協定満期後の位置づけである。プレゼントツリーの森は、10年後に「地元へ返還される」ことを前提としている。これは、外部主体が地域資源を囲い込むことを防ぎ、最終的な主体性を地域側に残すための重要な仕

組みとして設定してある。関係人口とは、地域に依存関係を生む存在ではなく、地域の自立を支える存在であるべきだという思いから、「11年目には育った森を地元で有効活用頂く」ことを目論んでいる。

図表4 森林整備協定調印式の様子

(「Present Tree in 笛吹芦川」／山梨県笛吹市・2025年1月)



地元行政（前列左：笛吹市・山下市長）、森林所有者（前列中央および右から二人目）、施業管理者（前列右：中央森林組合・米山組合長）、当NPO（前列左から二人目・筆者）の4者が署名。地域主体の森づくりを象徴する場面。

4. 森から周辺地域へ広がる関係性

～「きれい・楽しい・おいしい」が果たす役割～

プレゼントツリーの森づくりプログラムにおいて、森林整備そのものと同様、あるいはそれ以上に重視されてきたのが、地域の暮らしや文化、食といった周辺資源との接続である。この「きれい・楽しい・おいしい」を軸にした体験設計は、一見すると観光施策に近い印象を与えるかもしれない。

しかし、ここで提供されている体験は、一般的な観光とは性質を異にする。里親は、単なる来訪者ではなく、「自分や自社の大切な樹が育つ場所」を訪れる当事者である。この前提の違いが、地域との関係性に決定的な差を生む。観光人口は地域資源を消費する主体であり、その関係は基本的に一過性である。一方、プレゼントツリーの里親は、地域資源の維持・再生に関わる主体であり、その関係は継続を前提としている。

この違いは、行動にも明確に表れる。ツアー参加後、里親が地域の農産品を日常的に購入したり、知人に地域を紹介したり、あるいは再訪を自発的に計画したりする事例は少なくない。こうした行動は、補助金やポイント制度によって誘発されたものではなく、関係性の中から自然に生まれている。

例えば、各地の協定林の中でもプレゼントツリーの誘致に最も積極的な自治体の1つである熊本県山都町では、5箇所協定林を合わせて18,000本強の苗木に対し、個人69名、法人58社の里親を募ることができた。町との共催で毎年実施している森づくりイベントの参加者アンケートには、「また来たい」というコメントが頻出しており（図表5）、単発の来訪にとどまらない関係性が育まれていることがうかがえる。

図表5 「Present Tree in くまもと山都」 イベント参加者アンケート結果と里親の概況

Present Tree in くまもと山都 2021年4月10～11日第1回森づくりツアーアンケート結果(自由記述抜粋)	Present Tree in くまもと山都 2022年3月26日～27日第2回森づくりツアーアンケート結果(自由記述抜粋)
<p>“私、また来たいと思いました。”</p> <p>“2日間という短い時間にもかかわらず、五ヶヶ滝や通洞橋、樟樹活動など多くの体験ができて良かったです。ぜひまた参加させていただきたいです。山都町の自然の豊かさやおいしいごはんに感動しました。しかし、この自然が災害や中国人に脅かされているという話を聞き悲しいと思いました。”</p> <p>“とてもよかったです。今回植樹した木の成長を家で見に行きたいです。応援しております。”</p> <p>“PresentTreeは日本各地を考えると壮大なプロジェクトだと思います。山都町は季節もよく、すぐ緑やかな良い土地で、またいつか訪れたいと思います。”</p> <p>“とても美しい町で、豊かな自然にいきなりました。山都にまた来たいです。町のこともっと知りたいです。PresentTreeさま、このような機会をありがとうございます。”</p> <p>“PresentTreeのみならず、2日間、とても充実した。満足するスケジュール、イベントを組んでいただきありがとうございました。本当に素晴らしい自然でした。また参加させて下さい。”</p> <p>“山都町のみならず、2日間、大変お世話になりました。いつもこの美しい自然を守り下されい。農林業に就く若者たちが大勢山都町に集まるようお祈りしています。又協力出来ることはさせていただきます。”</p> <p>“また参加しますし、今度は会社同僚を連れてきます！”</p> <p>“どこに行っても温かく迎えてくださって、またどの場所も素晴らしい。家にもどりつなはなになって荒んだ心(笑)が癒されました。スチキな経験をありがとうございます。また必ず来ます！！”</p> <p>“こんなに良い所ばかりは思いませんでした。良い機会を作ってもらい感謝です！！”</p> <p>“心のこもったイベントに感謝、感謝です。ほんとうにありがとうございます。100年先の姿を想像するとワクワクします。”</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・次回も参加したいです ・また参加したいと思います。 ・また来年も来ます。ふるさと納税させていただきます。 ・山都町の皆さんとのプレゼントツリーさんの絆、信頼関係があってこそと思います。ありがとうございます。また来ます！ ・プレゼントツリーの活動はすばらしく、今後も継続して下さい。また次回も参加し、森づくりとともに、前回や今回うえた木をみに行きたいと思いました。 ・今年もすばらしいプログラムをありがとうございます。 ・森づくりの方々や町長さんまでおいで下さってありがとうございました。来年もまた来ます！ ・山都町の地元の方々との説明、お話し、ひとつひとつが全て心に残りました。地元の方々の活動や熱意がわかりながら植樹に参加できた事がとても良かったです。 ・もう少し町民の方々と触れ合う機会があればもっとお互いに印象深くなるかも。 ・SNSを通して協力ながら発信していこうと思います。森を育て続けることは難しいかもしれないけど、1年に数時間、30分出来ることが、今後100年に続くという事を初めて感じました。この企画に感謝です。 ・機会、ご縁あり、関わりをもてるようになったこと嬉しく思っています。引き続き応援させていただきます。 ・また来ます！ ・山都町の皆様と交流できるイベントがあるといいです。 ・この企画成功させましょう！
<p>“たいへん楽しかったです。来年も参加したいです！色々とお話しできよう、ご縁がありがとうございます！”</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現地来ないと感じられない空気感やお話しが沢山充実した2日間となりました。山都の皆様の心のこもったおもてなしと心が熱くなるほどでした。present treeのスタッフも親切で気持ちよくツアーに参加することができました。来年も楽しみにしておりますので宜しくお願いします！ ・林業者や地元の方や消費者等様々なpresent treeさん、有機農業全国一で自給率300パーセントの山都町さん、応援します。 ・素晴らしい育理を生み出そうとしている皆様にも、明るく希望を見せていただいた気がします。ただ、理想だけでは実現できないサイクルを主目的には、まず知ることに、訪れることが大切だと気づかされました。自分にもできることがあるのだと感じられたことが、大きな収穫でした。今後も、可能なカタチでこーしー種でまた来たいと思います。ありがとうございます。 ・とても素敵な町でした。多くの人を魅了するものが少しかわったように感じます。 ・植樹を通して、地域の文化や歴史を含め、自然の大切を改めて気づかされる。もっと若い人に参加してもらいたいと思う。 ・また、お邪魔したいです！ ・大変有意義で楽しい時間になりました。ありがとうございます！これから長く続く山都町のみなさまの関係のきっかけの一部になれて光栄です。また伺います！ ・環境について森づくりについて、その他色々考えさせられた2日間でした。今回のツアーに参加したことでも刺激になっており、今後の自分の行動にも影響すると思います。また次回も植樹と山都町の安心して食べられる食事を食べに行きたいです。 ・皆皆地の再と地元九州の山都町の発展に協力できる様、プレゼントツリー提案の活動を続けて参ります。 ・また、植樹がございませら、山都町のために植樹等でおこなうお力添えさせていただきます。ありがとうございます。毎回楽しみにしておりますので、来年もぜひお願いします！ 	<p>“これからも引き続き応援させていただきます。”</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プレゼントツリーの活動をますます広げていくことを祈っています。山都町のとりくみは皆の努力のたまものとします。簡単ではないと思います。これからも応援します。 ・今回、娘についていくという事でこういった活動を知らなかったのですが、参加する事ができてよかったと思います。雨が降って、天候観測ができませんでしたので、木を植えずに、星空を見にまた来たいと思います。 ・2年ぶりに訪問しました。今回もお世話になりました。豊かに思える山都町も絶大な信頼が置けたいと思います。この自然が残り続けたいと思います。 ・山都町は人口が減少している中、森林を維持して、町を守る為にごに目にやっても手が行き届いていて、素晴らしい場所でした。協力ながら、今後も協力していきたい。 ・旅費のようには応援させていただきます。 ・山都町の事をよりよく知れて、里親の木も植えることができて大満足です。！ ・山都町の取り組みは本当に素晴らしいです。(愛知県) ・ますます好きになりました。 ・今後も参加したいと考えてます。 ・山都町の自然と食べ物がとてもよかったです。また遊びに来ます。 ・山都町は初めてお伺いさせていただきましたが、今度は家族連れて旅行に行きたいと思っています。 ・これからもサポーター一員です！共に頑張りましょう！ ・また友人を誘って、参加します。 ・山都町の魅力がなくなさるんが心配な2日間でした。またうかがいで、よろしくお願ひします！
<p>“山都町も本当にすきな町でした。また来たいです！”</p> <ul style="list-style-type: none"> ・山都町がカーボンゼロなどに積極的とはきていたが、今回参加で思った以上に先を行っていることに ・気づきました！ ・PTさんのプログラムに参加することで山都町のような素敵な町のサポートができれしく思います。これからも山都町の自然が末永くつづきまうように ・山都町が活動していることを熊本全体に広めて日本を取り戻してほしい ・これからの活動と山都町が自然を考える人の目標であり続け、山都町の自然を100年後まで継承できるよう祈っています。 ・山都町の豊かな自然がこれからも豊かでありまうように。 ・久しぶりに大自然を感動できた山ででした。発展はして頂きたいがオーバーツーリズムで自然が壊れていけないことを願います。 ・4度目の山都PT来年も備ってきたいです。地元のみなさまのお心遣いに感謝です！ 	<p>【記念樹と里親】</p> <p>里親受入本数 : 18,298本 (2025/4/8時点)</p> <p>里親内訳 : 個人69名、法人58社</p> <p>イベント参加 : 延べ533名 (内350名が町外参加)</p>

関係人口施策においてしばしば「交流の中身」が問題視されるのは、交流が体験で終わってしまう場合が多いからである。プレゼントツリーでは、森という長

期的対象を媒介とすることで、体験が関係へと転化する構造が成立している。森は一度見て終わる対象ではなく、時間とともに変化し続ける存在であり、その変化を見守ること自体が関係性の継続を促す。

また、この仕組みは地域経済にも波及効果をもたらしている。里親による継続的な消費や情報発信は、観光施策とは異なる形で地域を支える。少額であっても長期にわたる関与が積み重なることで、地域にとっては安定した応援基盤となる。

例えば、「Present Tree in くまもと山都」の企業里親の最古参であるロクシタンジャポン株式会社では、プレゼントツリーの枠組みにとどまらず、山都町の有機農業をさらに推進するキャンペーンを企画し、企業版ふるさと納税を通じて町内有機農家を支援している。このように、関係人口としての関与が、別の地域課題への関心や行動へと発展するケースも生まれている。

ここには「量から質へ」という関係人口施策の転換点が示されている。「何人呼び込んだかではなく、どれだけ深い関係が、どれだけ長く続いているか。」その評価軸を導入しない限り、関係人口政策は表層的なものにとどまり続けるだろう。

5. 災害復興と関係人口 ～「短期支援」から「長期伴走」へ～

東日本大震災以降、日本の災害復興政策において繰り返し指摘されてきた課題の一つが、「時間の断絶」である。発災直後には、ボランティアや支援物資、人の往来が集中する一方で、数年が経過すると関心は急速に薄れ、被災地は再び孤立していく。復興が本格化するのはいずれも中長期に入ってからであるにもかかわらず、支援の多くは短期化しがちである。

こうした構造的課題に対し、プレゼントツリーは結果として、一つの実践的解を提示してきた。それが、災害復興と森林整備協定を結び付けた「復興支援型プレゼントツリー」である。

2011年の東日本大震災後、岩手県宮古市、宮城県大崎市、福島県広野町などで展開された復興支援型の取り組みでは、災害復興事業の一環として造成された防災緑地や被災跡地等において10年間の森林整備協定を締結し、都市部の里親を募った。ここで重要なのは、森林整備そのものが目的化されていない点である。森はあくまで、被災地に人の流れを呼び戻し、関係性を継続させるための「媒介」として機能している。

特に福島県広野町においては、震災に加えて原子力災害という複合的被害を受け、一時は全町避難を余儀なくされた。インフラ整備が一定程度進んだ後も賑わいはなかなか戻らず、地域社会の再生が大きな課題となっていた。防災緑地の一面に整備されたプレゼントツリーの森は、そうした中で、都市部の里親が定期

的に訪れる「交流拠点」として機能し始めた（図表 6）。

注目すべき点は、ここで生まれている関係が、従来の「支援する側／される側」という一方向的な構図を超えていることである。里親は被災地を「助ける対象」として訪れるのではなく、「自分の樹が育つ場所」「顔見知りの方が暮らす地域」として訪れる。被災地側もまた、支援を受ける受動的な存在ではなく、ともに未来をつくる主体として都市部の人々と関わるようになる。

図表 6 「Present Tree in ひろの（福島県双葉郡広野町）」
防災緑地造成地の植栽風景と交流の様子

森づくりで被災地を支援＜福島県双葉郡広野町＞Present Tree in ひろの

福島県の浜通り地方に位置する広野町。
震災の津波災害にあった沿岸部に防災緑地が造られました。その一面に福島県地域在来の広葉樹5種を植え、地域復興の拠点となる賑わいの森をつくりました。この森を通して町に賑わいをとり戻し、広野町のさらなる復興と新しい双葉地域の創造に向けて、Present Treeでは毎年ボランティアバスを走らせて首都圏の人たちを現地にお連れしています。



2021年3月11日には、コロナ禍による緊急事態宣言下にもかかわらず、広野町から首都圏の里親に対し、「3.11復興10年を刻むセレモニー」への招待があり、当NPO所轄庁である東京都をはじめ関係各機関に開催の適否を確認した上で、厳格な感染対策を講じ、「Present Tree in ひろの・復興10周年バスツアー」を実施した。

42名の熱意ある里親と、当事務局を含む47名が東京から現地入りし、広野町民とともにこれまでの復興を振り返りながら、更なる復興・発展への願いを込めて、里樹の植わる防災緑地に明かりを灯し、200個のスカイランタンを夜空に打ち上げた（図表 7）。

このような被災地において関係人口を育んできた経験を踏まえ、2025年5月

には、奥能登・輪島市北部の町野町金蔵地区において森林整備協定を締結した。都市部の人々が里親として10年間にわたり現地に通り、地域と交流しながら共に森を育てることにより、金蔵地区に新たな関係人口を育み、奥能登の復興と地域再生を進めていく。

図表 7 「3.11 復興 10 年を刻むセレモニー」開催の様子（2021 年 3 月 11 日）

地元巻き込まれてー福島県広野町3.11復興10年を刻むセレモニー

緊急事態宣言下、広野町からの要望に応え、さまざまな機関に確認しながら厳格な感染対策を講じた上開催。「ひろの防災緑地」の一画に在る「プレゼントツリーinひろの」では、約2000本の樹の里親さん達が継続的に足を運んでいる。



災害が頻発する時代において、復興政策には「長期伴走」を前提とした関係人口の設計が不可欠である。プレゼントツリーの実践は、復興支援と関係人口創出を切り離すことなく、時間軸の中で両者を統合してきた点に特徴があり、今後の災害復興政策を検討する上で、一つの示唆を与えるものと言えよう。

6. 企業里親と組織型関係人口

～ CSR を超えた共創パートナーシップの可能性 ～

プレゼントツリーのもう一つの大きな特徴は、里樹合計 43 万本超の内約 9 割が企業里親に支えられている点にある。当初は個人参加が中心であった本プロジェクトは、一定規模に達した段階から、企業の関心を集めるようになった。周年事業の記念植樹や、顧客・取引先への贈答、ESG や CSR の一環としての参画など、その関わり方は多様である。

重要なのは、企業が単なる資金提供者としてではなく、「関係人口の担い手」として機能している点である。企業里親の場合、一本の樹の背後には、社員やその家族、取引先といった複数の個人が存在する。社員が現地を訪れ、森づくりや地域交流に参加することで、個人レベルの関係人口が組織内に波及していく。

これは、人的資本経営の観点からも示唆に富む。地域と直接関わる経験は、社員の価値観や視野を広げ、企業活動そのものに影響を与える可能性を持つ。実際、ある企業里親においては、新入社員研修の一環としてプレゼントツリーの森づくり体験プログラムを導入したところ、新入社員の定着率が向上したとの報告がなされている。

さらに、企業という組織を媒介とすることで、個人のライフステージや異動に左右されにくい、安定的な関係人口が形成されやすくなる。近年、協定満期を迎える森が各地で出てきている中で、協定締結時には想定されていた森の返還が、必ずしも円滑に進まないエリアも見られる。

具体的には、地権者の高齢化により、その後の森林管理を担う主体が不在となり、やむを得ず協定延長を申し入れられるケースがある。こうした状況において、延長協定の引き受け手として企業里親が名乗りを上げる事例も現れ始めている。

関係人口政策は、人口減少が進む中で、個人の自発性だけに依存するモデルには限界がある。企業をはじめとする組織を「関係人口のハブ」として位置づけることで、関係人口の裾野と持続性を同時に確保することが可能となる。

プレゼントツリーにおける企業里親の広がりや、関係人口を「個人属性」ではなく、「組織的関係性」として捉え直す必要性を示している。

7. おわりに ～ 100年後を見据えて、森を媒介に人が循環する社会へ ～

日本の人口は、今後100年で現在の三分の一、あるいは四分の一にまで減少すると予測されている。その中で、国土の約7割を占める森林を、誰が、どのように守り、活かしていくのかという問いは、避けて通れない国家的課題である。

従来の森林政策は、林業の担い手や行政による「管理」を前提としてきた。しかし、担い手の減少が加速する中で、このモデルは限界に近づいている。必要とされているのは、森林を特定の主体が管理する対象としてではなく、多様な人々が関係性を持ち続ける「場」として捉え直す発想である。

プレゼントツリーが20年にわたり実践してきたのは、まさにこの関係性の再構築であった。43万本を超える記念樹と、その背後にいる里親は、単なる支援者ではない。森と地域に関わり続ける社会的資本であり、関係人口そのものである。

「山笑う」という言葉がある。春、草木が芽吹き、山がほほえむように見える情景を表した季語である。この言葉が示すのは、人と自然が切り離されていない

世界観であり、森が人の営みとともに存在してきた歴史である。

関係人口政策とは、単に人の流れをつくることではない。人と土地、人と自然との関係性を、現代の制度として再構築する試みである。森を媒介に、人が循環する社会をいかに実現するか。プレゼントツリーの実践は、その一つのチャレンジでもある。

100年後、日本中の森が笑っていること。その未来に向けて、関係人口を「育てる」政策が、今、強く求められている。